

[原著論文：査読付]

日本との関係から見る近代モンゴル要人

孟 根^{*,**}

An Analysis on the Modern Mongolian Dignitaries from the perspective of the Relationship between Mongolia and Japan

Meng Gen^{*,**}

Abstract

The modern Mongolian dignitaries had crisis awareness, which became stronger by the experience in Japan. They analyzed Mongolian society from various angles such as educational problems, land issues, independence and self-government problems, human rights and made a great variety of suggestions and comments on how to build a reasonable society. Besides, they called on everyone to act.

During the Manchukuo era, the modern Mongolian dignitaries had two sides of personalities and took advantage of all the forces which should be used. However, the ambition to strengthen their nation was hidden behind these actions. Therefore, they were easily branded “Mongolian Traitors”. And it is definitely unreasonable to keep on blaming them.

From the modern Mongolia-Japan relations, the non-government communication have played a more positive role than the official one. Following the spirit of “Human Coexist with Peace”, we should sum up the historical experience to face the future. When thinking about the Mongolia-Japan relations, we should elevate the non-government activities to the important position and seek for the simpler communication.

*九州共立大学共通教育センター
**内モンゴル大学外国語学院

*Kyushu Kyoritsu University
**Foreign Languages College, Inner Mongolia University

はじめに

「近代」といえば中国内では1840年のアヘン戦争から1919年までの時期をいうのは一般的である。ところが、この分け方がモンゴルに当てはまらないことがあるから、ここでは多岐にわたらないように「近代」を19世紀末から20世紀半ば頃における時期であると限定する。これに基づいて国内外諸勢力が略奪する目標となった、社会関係が極めて複雑であったモンゴルの事情を分析する。

近代モンゴルについての研究が進んでいるが問題点も多く現れている。特に目立っているのは立ち入り禁止の領域があり、研究者たちはその領域内に規制が入る前に足を運ぶか、より周囲の様子を合わせることは多い。これは10年前の話であるが、私が日本から帰国し、博士論文の中から一部分を取り出し「ジャライド旗における土地改革の是非を問う」¹⁾ というテーマで書き直したものをある学術雑誌社に投稿したが不採用であった。理由は「テーマが非常に敏感で、我々編集者が政治責任を負えない」ということである。このように、土地改革問題や文化大革命問題などは討論会で討論してもかまわないが公開発表は避けられている。だから少なくない研究者は香港や日本で成果を出版したり発表したりしている。

歴史研究の重要な価値は、真相を明らかにすることであり、これは、我々中国共産党の一貫する实事求是原則と一致する。つまり、研究対象を客観的に取り扱い、一つのを二つに分けながら、歴史人物を巻き込む環境のなかで、その行動と動機を正しく把握しなければならない。

以上を踏まえて、本論は「日本との関係」といった角度から近代モンゴル社会を考察し、日本を抜きにしてはモンゴルの事情が論じられない時期、特に偽滿洲国時期におけるモンゴル要人を分析し、彼らにどのような歴史的評価を与えたらよいのだろうか、という繊細な課題に取り込みたい。また「当時の内モンゴルの徳王自治政権が日本軍に依拠しなければ樹立も存続もできなかったように、現在のモンゴル国も日本の無償援助や支援なしには成り立たない。当時、関東軍が内モンゴルでアヘン栽培を奨励し、そのアヘンをアジアの占領地で売りさばき、莫大な戦費を得た。今も日本は『国策』として原産を押し売りしている。原産はアヘンよりも甚大な被害をもたらした。末代までの禍根を残す。」²⁾ とある研究者が指摘したように、我々は蒙日関係が再び厳しくなり諸問題を引き起こそうとして

いる現実と直面している時期に、改めた蒙日関係を見直し、双方発展にもっとも重要なものは何であるかという課題にも取り込みたい。

1. 近代蒙日関係の始まり

長い歴史上モンゴル人と日本人の間に接触、衝突、戦争などが起こったことは事実である。大昔モンゴル系の人々が日本列島に入って地元の人と混血したという説がある。2001年NHKスペシャル「日本人：はるかな旅」という番組によれば、取手市「中妻貝塚」の集中人骨埋葬土壌の人骨の一部は、シベリアのブリヤート人と遺伝的に最も近く、29体の縄文人のうち17体がシベリア平原に暮らすブリヤート人とDNA配列が一致した。中妻遺跡人の中に、北方アジアを故郷にする人がこれだけ高確率で出たことは「日本人はバイカル湖畔起源説」という学説の信憑性をより高めた。また騎馬民族征服論では、大陸東北部に出た半農の騎馬民族の南下した一部がいわゆる高句麗となり、さらにその一部は4世紀初めに対馬、壱岐を経由し九州北部を征服し倭韓連合王国を作ったと推測する学者もいる³⁾。

モンゴル帝国の際、皇帝のクビライ・ハーンが東征し、日本を襲い「蒙古来襲」といったパニックを日本列島に齎した。諸勢力を自分の統治範囲にどんどん入れていたクビライ・ハーンは、となりの日本も当然臣民になってくれるはずだと思って、日本へ大使を派遣したところその手紙が蔑ろにされ大使も残酷に殺された。これをきっかけに日本を勢いよく襲ったが惨敗した。神様の吹かした風のお蔭で日本が救われたというより神様の嫌う侵略戦争のせいで彼が吹き飛ばされたと言えるだろう。

17世紀頃モンゴル部族が清朝に征服された以後、モンゴル人の生活や精神状態に大きな変化が起こり、これまで光っていた英雄精神がなくなった。なぜなら、長年戦争に巻き込まれたことでモンゴル人が不安定な日々を嫌がり、心の静かさに憧れ、落ち着いた生活環境を求めようになったからである。丁度そのときチベットからラマ教がモンゴルにはいり、教主たちがそれをもっと布教しようとしていた。このタイミングでモンゴル人とラマ教が結びつき、現実より宗教的幻想的な世界に目を向け、息子たちを寺に送り僧侶にして、読経を重んじるようになった。これがモンゴル民族の英雄時代が完全に終わったということをお話している。

また、清朝はモンゴル人をいかに封じて他人と連絡

させないように工夫したことにより、モンゴル人に与えた影響は極めて大きかった。蒙旗のデメリットについて、偽満洲国時期に少なくない日本人は「蒙古に旗というものができ、旗の界が限定されるようになり、その界をこえて遊牧することが禁じられることになってから、昔のような大活動ができなくなった。これは、蒙古の弱くなったひとつの大きな原因であろう」⁴⁾とみていた。確かにそうであるが、それよりモンゴル人を外の世界から隔離しようとしていたところで蒙旗制度が直接に役割を果たしていた。

このように外から取り残され、読経に熱心したモンゴル社会であるが、近代に入ってくると変わり始める。

そこに蒙地開放の原因がある。これまで遊牧していたモンゴル人は漢農民の入植によって局地的に定住した。山東、直隸の農民が主に古北口、山海関をくぐって蒙地に入植していた。関口は容易に通過できるものではなく相当苦勞するという意味でこれを中国語で「闖関東」という。陝西、山西からの農民が主に殺虎口をくぐり、帰化と河套一帯に入植していたがこれを「走西口」という。このように私的開墾によってモンゴル人の定住も広がり、漢人との雑居が顕著となった。その後、清朝光緒皇帝の施行した「移民実辺」はモンゴル人の定住生活に拍車をかけ、遊牧生活を速やかに農耕定住へと転換させた。長年にわたる外との連絡が絶たれた状態から見れば、「蒙地開放」はある程度進歩したようであるが、それはあくまでも封鎖社会に対照したもので決して現代「開放」と同じではない。

その後モンゴル人が徐々に行ったり来たりし、外との連絡が多くなった。しかも情報を相互交換でき、モンゴルだけではなく世界中にながら起こっているか、これからどのように動いていくかにまで関心を持つ人が増えていた。その一方、内地からの農民行列のかたわらに外国人も現れるようになった。比較的はやくモンゴル人の前に姿を現したのが日本人であった。日本について、地理的な原因からモンゴル人は他より早くから知っていた。例えば19世紀のモンゴル作家インジャンナシは、その長編小説『泣紅亭』で海賊が南海岸地域にとどまらず遠く日本、琉球島にもいたるほど大騒ぎを起こした（「賊众又犯东南，劫掠日本，琉球等地。于是各自坚守海峡。贼料无利可得，继而西出别子门，劫掠余姚，富阳等地。」⁵⁾と書いてある。モンゴル人は彼らのことを「nippon」と言っていた。ところがこの時の日本はもう昔の日本と違って、明治維新を契機とし強国になり、二度と「蒙由来襲」の前に怖がったり震ったりしなくなった。却ってよく威張っ

て隣合わせの国と地域を略奪しようという野心が膨張していた。日露戦争前後、中国東部地域における日本の支配力は日増しに強まり、諸功利目的でモンゴルにばらばらに進入する日本人がよく見られていた。

近代においてもっとも早い時期に蒙日関係を開拓した人物は、ハラチン右旗のジャサク貢桑諾爾布である。1899年郡王を世襲し人々に貢王と呼ばれるようになった。彼が常にハラチンと北京の間を行き来し、情報などを迅速に耳にしていた。清朝の新政のもと内地を参考にし、蒙旗の教育を極めて重んじていた。当時、内地は留学が流行になり、1896年から1899年までたったの200余人の留学者数は、1903年に1000人以上、1911年は数万人以上にも達した⁶⁾。どちらかといえば日本への留学者数が西欧より多かった。その原因は学費の安さにある。清政府は国費留学生に1人当たり年間1200銀兩を支給したが、早稲田大学の1年間の学費は僅か17銀兩だけであった⁷⁾。学費の他、日本と中国の短距離、日清戦争後日本入国ビザ不要であるなどの原因もある。

1903年、貢王が大阪で開かれた内国勸業博覧会を見学し、東京実践女学校校長下田歌子を訪問した。当時、東京実践女学校で清国留学生部が設けられ、中国人を受け入れていた。下田歌子がまた需要に応じ、清国留学生部を他の場所でも増設したことがある。日本を訪問する際、貢王が特に日本の自然環境と教育に心が惹かれていた⁸⁾。日本での諸見聞は、貢王の決心を強め、帰国後寺院と異なる新式学堂を引き続き創り、本旗の子供に知識を与えるかたわら、1905年女子3人、1906年男子5人を留学生として日本へ派遣した⁹⁾。

このように貢王によって近代蒙日関係が始まった。彼にとって日本はまるで暗闇を照らす明かりのような存在であった。残念なことに、その後日本帝国主義に利用されることを彼自身も予想できなかった。

2. 在日体験をしたモンゴル要人

留学が盛んになったのは偽満洲国時期である。この時期にラマ出身の留学生も多く現れ活躍していた¹⁰⁾。そのなか日本で特別の生活を過ごすラマもいた、と李守信の回想録で記している¹¹⁾。一方、社会人や役人たちも見学目的で来日していた。福岡市志賀島蒙古塚の場の一つの石碑があり、上に「興安南省東科後旗旗長包尼雅巴斯爾一行参拝」と刻まれている。これは本旗の旗長をはじめとする役人一行が偽満洲国時期に日本にきて、ここを見学したことを示している。

ここでわかりやすく説明するためにモンゴル要人の日本滞在を、留学と訪日といった二つのルートにわけ、それぞれの状況を次の順番でみる。

(1) ロブサンチョイダン

ロブサンチョイダン（罗布桑措丹 1875-1921年）はハラチン左旗人であり、出家して寺でラマになったため地元で「三ラマ」とも呼ばれていた。1907年から1911年まで政府派遣生として東京外国語学校で学習し、そのあと京都の本源寺で学習した。書籍翻訳を通じて日本及び世界の文明をモンゴル人に見せたがっていた。また日本で盛んに行っていた実地調査にも興味があり、それを利用してモンゴル人の生活改善を行うことを目指していた。ところが帰国後これらの夢が実現できなくなり難航した。当時、実地調査について「日本人が東モンゴルであっちこっち歩き回っているが商売やスパイの行為に違いない。もしかしてあなたの調査もこのようなものではないのかい」と疑問を持つ人が多かった¹²⁾。ロブサンチョイダンは才能がありながらチャンスに恵まれていなかった。後に日本人の紹介で満鉄会社に入社し蒙古事情の係りとして勤めた。

まもなくロブサンチョイダンは『蒙古風俗鑑』という本の執筆を始めるが、終わるまで長く時間がかかった。本書ではモンゴル社会がリアルに記録され、これまでになかった資料価値と民族学的価値を有することで高く評判されている。特に、その提出した観点は優れたものであると私が思う。本の中で、モンゴル人が営む遊牧は天から賜ったものであり、そのお蔭で人と自然が適切している。自然に従って、人間の生き方と植物の生え方にも相違があるから、我々モンゴル人は遊牧以外の生業をできないという理由で自分のことを責めてはいけない。農耕もしなくて、時代遅れているという理由で我々のことを批判している人こそ却ってでたらめである、と述べている¹³⁾。ロブサンチョイダンは、ばらばらに現れしかも徐々に奥の方に進んでいる日本人について、これが蒙地開墾を引き継ぐ漢人のと同じく、我々モンゴルによいものを与えるわけではない、と鋭く論じた後、チンギス・ハーンの残した資源が間もなく彼らの私有物になろうとしている。しかし、モンゴル貴族たちは依然として反省せず傲慢にいる¹⁴⁾とさらにモンゴル現実社会を批判した。

上記の思想は、ロブサンチョイダンの考察や実践の積み重ねによって形成されたのである。そのなか、彼の日本へ留学した体験も大きく役立ち、彼の視野を広め、ものを見通す能力を強めていた。仕事の手段とし

て彼が行った実地調査も、実は日本の影響を受け身につけたものである。ロブサンチョイダンの務める満鉄会社が実地調査を重んじ、モンゴルをはじめとする各地域で早期調査を行い、資料を大量に収集していた。日本との関係を抜きにしてはロブサンチョイダン及びその近代思想が論じられない。

(2) テメート

テメート（特睦格图 1888-1939年）はハラチン右旗人であり、近代蒙古活字発明者、出版者でもある。崇正学堂卒業後、貢王から北京の東北鉄道ロシア専門学校や日本東京振武学堂に派遣された。留学してから7年目に帰国し、翻訳と医者の仕事を務めた。しかし、彼は教育問題、現代文明伝播問題などに重心を傾けさせ、これまでモンゴル活字が無かった現実をいかに改善すべきかに力を尽くした。そして、1922年活字開発に成功。その翌年の1923年に蒙文書社を創り、教科書開発をしながら書籍印刷に取り組み、7年間に渡って教科書などを含む書籍を10万冊出版し、各蒙旗学校に届けた¹⁵⁾。

(3) ジャクチスチン

ジャクチスチン（札奇斯欽 1914-2009年）はハラチン右旗人であり、1938年日本に留学し、早稲田大学院に入学した。日本にいたとき「近代蒙古政治地位之变迁」¹⁶⁾「清代蒙古地方政治制度」¹⁷⁾などの論文を書き蒙古と中原、蒙古と隣国との関係からモンゴルを位置付け、主にモンゴル民族が遊牧に携わる原因、清朝の蒙旗制度を施行する狙いなどを論じた。その留学生活について彼の知人は「東京に滞在しているうちに彼が鳥居龍蔵、矢野仁一等の学者に教わる一方また小林高四朗、後藤富男氏等と付き合い極めて影響を受けた」¹⁸⁾と評価されたことがある。ジャクチスチンは日本から学んだもの、細かに考える方法、理性的分析方法をいかして、モンゴル社会が抱える諸問題を考察し始めたのである。これらの問題の中、彼がより重要視していたのは土地問題である。

偽満洲国時期に彼が徳王の側に務め、時事政治を鋭く読み取り、モンゴルと各勢力との関係からモンゴル人の歩む道を考察していた。後期に彼の頭に一つの思想が熟され、いわゆるモンゴル独立、自治運動とはあくまでも土地問題のことであると主張するようになった。漢移民によって遊牧地が少なくなり、モンゴル人の生業が壊された。自治区域とは蒙旗原有土地に基づき、県という行政区域を枠から外すべきである。従っ

て目下もっとも重要なのはモンゴル人の土地を保護し、また取り戻したう遊牧経済を発展することであり、モンゴル人に権力を与えられる高度自治区域を実現することである¹⁹⁾と述べた。実はこれは多くのモンゴル人の声でもあった²⁰⁾。ジャクチスチンは国民党政府内だけではなく、社会中にも自分の思想を広く伝えた。当時の国民党紙に「モンゴル人の願望」(「内蒙古人民願望」)という文章を載せ、次の観点を強調していた。モンゴル人は高原地帯に生きながら自然に適した生業に携わっている。寒冷、小雨量である土地で農耕をすることは天に背くことである。開墾拡大に従いモンゴル人が肥ゆる草原を失い、いま、わずかに砂漠地帯しか有していない。現実には極めて厳しい状態であるが、これはまるで「モンゴル人は死ね!」と言われるように感じられる。モンゴル社会の遅れをもたらしたのは遊牧経済ではなく遅れた経営技術である。農耕を重んじ遊牧を軽くすることは絶対許さない、と大きな声で訴えた²¹⁾。1946年12月のある日に開かれた記者会見では、ジャクチスチンは多くの人に囲まれ責められていた。ある者が「よく蒙古独立や蒙古自治を主張しているが、本当にそれが必要なものなのか。やっぱり少数の人が『モンゴル』という文字を額に書いて、わざとらしくしているのと同じであるに違いないよ」と反発した。ジャクチスチンは「我々モンゴル人には自分なりの生業があり、それに基づいた生活する権利がある。これはもっとも基本的なものでもあり、ゆるぎない道理でもある。あなたたちは天から賜ったものを我々の手から奪おうとしているのだ」と指摘した²²⁾。

(4) 徳王

徳王(1902-1966年)、またはテムチグドンロブという。1930年初めの頃日本関東軍の支持で蒙古軍政府を成立した。これをもとに蒙古連合自治政府を作り、みずから主席を務めた。第二次世界大戦後重慶で蒋介石と和解し、反共運動に従事した。1952年蒙古人民共和国により北京へ送還され、服役した。1963年特赦で釈放され、その3年後に逝去。

徳王が前後2回ほど日本を訪問した。では、訪日によって彼はどのように変っていったかを見てみる。

徳王の第1回目の訪日は、1938年10月に行われ、蒙古連合自治政府から李守信らが随行し、他に関わる日本人もいた。徳王の側近であるジャッチスチンの話によると、今回の訪日を日本人が計画したがそこに蒙古傀儡政権樹立という成果を日本国に報告する、徳王の蒙古独立理念を断念させる、といった二つの目的が

あった。徳王は、今回の訪日を蒙古独立思想が日本まで広く訴えられるチャンスとみて、心構えをしていた²³⁾が、自分が日本人にコントロールされ、蒙古独立などの発表内容が強く削除させられたことは予想以上であった。これは、徳王を最初から支持し、「蒙古独立に協力する」という日本人と完全に違っていた。なぜなら、支持する振りをしながら徳王らを日本帝国主義統治範囲に入れ、奉仕できる勢力にする、という政策へ変わったからである。徳王は日本人が嫌がってもそれを頼り、私的人脈を生かし、当時の陸軍大臣を訪ね、自分の観点をやっとな訴えた。しかし相手が「蒙古の独立建国問題は時期が熟さず、条件が備わっていません。外蒙古を回復し、内蒙古と外蒙古の統一を実現した上で、はじめて蒙古の独立建国の手助けができます。これは我が大日本帝国の蒙古に対する国策で、みなさんも信じて頂きたい」と同じく回答した²³⁾。

さらに、日本側が彼らの蒙古独立祈願を徹底的に断念させるよう今回の日程に何日間かけて博多湾元寇防塁遺跡を見学する内容も入れた。福岡市志賀島蒙古軍供養塔の掲示板に「この地は、文永11年(1274年)および弘安4年(1281年)に二度にわたる元寇襲来の古戦場とされ、古くは『首切塚』とも呼ばれていました。この供養塔は、文永、弘安の時襲来の際戦死した元軍の兵士のため、昭和2年(1927年)に日蓮宗の僧侶高鍋日統の提唱で建てられました。昭和13年(1938年)には蒙古連盟自治政府の指導者である徳王も参拝された」と書いてある。元朝兵士の戦った場所は古跡として博多湾沿いに多く点在している。私が現場につき、海の音を聞き足元を実感する際心境が複雑になり、微妙な感じに捕られていたことは事実である。特に同じ場所を重ねさせられることはより辛く感じられると思うが、見学していた徳王一行も耐え切れず「昨日も元寇防塁、今日も元寇防塁。どうしてだろう?我々モンゴル人はこれを見たくない」と非常に腹を立てた²⁴⁾。日本側の意図が明確であり、「それほど強かったグビライ・ハーンでも我々日本に残酷に負けたのだから、あなたたちが日本帝国統治下から離れて独立するなんて無理、まだまだ弱くて小さいのだから」ということである²⁵⁾。これは徳王の忘れがたい第1回目の訪日であった。

その後の1941年に第2回目の訪日を行った。今度の目的について、随行の李守信は、汪精衛中央政権から脱却し、日本天皇への忠誠を通じて、より実力を拡大するためであったと述べている²⁶⁾。日本側が懐柔と籠絡政策を講じ、モンゴルが日本と特別な関係を持つ

ということを他人に見せるように、訪日日程は軍事と政府首脳への訪問、名所観光、学校と工場への見学などからなり、上の指示を受け日本各界が歓迎と招待に尽くしていた。徳王もこれをはっきりわかっていた。彼は前もって「蒙古建国促進案」を作り、日本側に提出することを願っていた。長山義男の回想録によれば、本案の意図は「日本の援助に依存し大蒙古建を切望し、さらに日本を盟主とし新アジアの国家群を早期に確立し、蒙古もその一員となることを欲するものにして、即ち蒙古自身の生存発展のために努力を払う。」²⁷⁾ということである。ところがうまく行われなかった。蒙古独立問題について自分たちの強烈な要望を日本首脳に直接訴え、より一層の理解と支援を求めようとしたが、無効な結果になったことに徳王が憤怒したり不満したりし、心境が落ち込んでしまった。

3. 近代モンゴル要人をいかに評価したらよいか

同じ貴族出身の貢王と徳王は、いずれも日本との関係が深かったが、後の運命がそれぞれ違って、貢王が「教育家」「開明王公」と称えられ、徳王が「蒙奸」「漢奸」から出た言葉が、国家や民族の裏切り者と批判されている。徳王について特に中国の非モンゴル人研究者は「民族分裂者」²⁸⁾「モンゴル人の巨奸」²⁹⁾「祖国を裏切るもの」³⁰⁾とならず者のようなものになっている。

実は貢王にも同じく罪を犯したできごとがある。貢王は生きていた間に日本の特務及び関東軍と仲良く付き合っていた。彼の創った学校で河原操子が先生として勤めていたが、この河原操子の本当の身分は特務であり、上海の工作を終えた後、モンゴルを狙ってハラチン右旗にやってきたのである。彼女は王府で活動を続け、情報を集め、仲間を迎えたり送ったりしていた。貢王が知らずのうち彼女の力になり、その仕事に協力していた。もっとひどいことに、日本は、借金と武器を提供する条件で貢王と「契約書」も結び、「団体は須らく内蒙古全部を統一する機関を設立し以て文武一切の要政を掌理すべし」「カラチン王は川島を以て総顧問とし、文武一切の事宜に参画量せしむ」「用いる所の要員は川島の監督に一任してカラチン王の命令節制に服従し以て規律を重んず」との条例を書き込み、カラチン王府及び本旗全体を「蒙古工作」を行う拠点にした³¹⁾。日本が陰謀を図って貢王を利用したことはこれだけではない。

貢王と徳王の違いは生きていた時期である。貢王が1931年逝去した故、偽満洲国時期といった特別時期

には当たらなかった。しかし徳王は貢王より30歳の年下であり、1902年の生まれであった。彼が成人になって、周囲の注目を集め頭角を現そうという時は、まさに偽満洲国時期が開始していた時であった。あいにく彼が偽満洲国時期に入って、日本と絡んだ傀儡政治舞台で行動し使命を果たした。近代におけるモンゴル要人が非難されたり批判されたりする主な原因は、この時期に生きて、この時期に活躍し、しかも日本人と「親しい」関係を持っていたことにある。後人が彼らを異常に見つめ、「日本」という痕をその顔につけ、彼らのことをよく「蒙奸」と呼ぶ。もし貢王が長生きをし、偽満洲国時期を貫く政治舞台に活躍していたとしたら、徳王と同じく結果になるに違いない。

では、このような日本との関係、偽満洲国を舞台にして活躍していたことから徳王をはじめとする近代モンゴル要人を、簡易に「蒙奸」にして、ひたすら非難するのがよいのだろうか。

「徳王の少年時代は、中国と内モンゴルの政治が激しく変化する不安な時代だった。清朝が倒れ中華民国が成立し、外モンゴルが独立を宣言した。このような不安定な社会状況が徳王に深い影響を与えた。チンギス・ハーンの末裔として蒙古帝国の復興は徳王の掲げた理想だった。彼の存在に注目したのは関東軍であった。強固な基盤を持たない徳王は、『蒙古独立』を企図したが、当時の国際情勢や中国内の状況でそれがうまくいかず、結局国民党・日本に利用され、その政権は日本の対中軍事戦略のもとにつくられた傀儡政府になってゆくのである。」³²⁾確かにそうである。要するに徳王は自分を強く立ち上げようとしたが勢力を保っておらず、他を頼る環境におかれていた。しかし否定できないのは、諸勢力と接触したり協力したりしていた徳王には明確な目的があり、モンゴル民族をどのように救うのか、どのように強めるのかということを目指していた。彼はこれを最後まで堅持し使命を果たした。日本が敗戦する直前、「東の寧夏に行って開放を受け入れ中共に降る、北上してモンゴル人民共和国に活躍を求める、西進して海外に亡命して米国や蒋介石と手を結ぶ」といった三つの選択肢が彼にあった³³⁾。ところが民族大業のため躊躇わず北上を選んだのである。彼にとっては「西進して海外に亡命して米国や蒋介石と手を結ぶ」ことは唯一の避難できる場所かもしれないが、簡易に彼に放棄された。

徳王が日本帝国主義者と一つになり、人類にはあってはならない罪を犯したのは間違いなく事実である。ところが、モンゴル民族の未来を出発点と終止点にし

たことから、ひたすら批判や否定を受けることは本当によいのか、という疑問が出てくる。諸勢力が複雑に絡んで、モンゴルの土地や人間権力を奪っていた環境のなか仲間をいかに選択するのか、誰の立場に立ったらよいのかは非常に難しい問題であった。

徳王を客観的に分析しなければならない。今、徳王旧居を修繕し、名所旧跡にして開放した。「蒙奸」なのになぜこのように待遇されるのか、と抵抗する人が多い。反対にラチン右旗王府及び高く作られた貢王記念像を見学し、「なんていう素晴らしい、なんていう偉い人物だろう」と感嘆する人が多い。徳王と貢王の違いは、本当に彼らの生きていた時期によるものであるのか。

上記のように、徳王は非常に敏感な話題であり、その「蒙奸」という帽子が彼の民族のため努めた事跡を覆い、歴史的な真相探求を妨げている。任翔は、近代内モンゴルを考察し、複雑な環境の中にいる誰も、いずれかの政党に属されたり絡まれたりすることは避けられないとみている。さらに、今までのやり方について任氏は「青生地に白日、これが国民党の旗印であるが、烏藍夫が内モンゴル自治政府を設立する際に会場にこの旗を高く掲げていた。単なる旗からは、内モンゴル自治政府に参加した人は、皆『国民党のもの』、皆『反動派』になってしまうのか」と批判し、歴史に関してはその表より中身を重要視しなければならない、と主張している³⁴⁾。要するに、一つものを二つに分けて客観的に分析し、決して水と一緒にすべてのものをかけ流してはいけない、ということである。ある研究者は李守信について論じる際「その是非功過は一言で総括するのが至難である。だからこそ、最大限に事実近づき、真相を掘り起こす研究は重要である。」³⁵⁾ といったが、ここには深い意味が含まれている。

近代要人を如何に客観的に評価するかは、歴史真相を如何に明らかにするかにつながる大きな研究課題である³⁶⁾。喜ばしいことに、日本をはじめとする外国ではこの研究が盛んに行われ、豊富な資料や出来事について細かな整理を行い、これまで内モンゴルで批判されたモンゴル要人を改めて見直し、客観的に分析しそれぞれの実像を復元している。これは、内モンゴル研究者に示唆を大いに与えているところである。

おわりに

以上の論述から以下のようなことが分かる。

一、近代モンゴル要人に危機意識があり、在日体験に

よりそれはもっと強くなったのである³⁷⁾。日本での留学は彼らの生涯に大きなメリットを与え、各領域で活躍できることに働きかけた。彼らは教育問題、土地問題、独立問題、人権問題などの角度からモンゴル事情を分析し、如何に合理的な社会を創るかについて多種多様な提案を提示し、人々を呼びかけた。彼らは視野が広く、見通す能力を有し、鋭い観点があることで周囲を導いていた。

徳王にとって、その2回の訪日はただの見学ではなく、彼が学んだことは意義深かった。蒙古聯合自治政府が完全に日本の傀儡政権になり、もともとの独立自治運動という彼の政治理念がより遠く退いた。心境が落ち込んでいる中、彼は目が覚め、これからの道を如何に歩むべきかを真剣に考えはじめたのである。ところが、行く先が朦朧であり見えにくい状態が続き、彼の背負う危機意識は他より重く、しかも苦渋的であった。

二、近代モンゴル人の性格には正反対という両面があり、簡単に「蒙奸」という帽子をかぶらせ、ひたすら非難することは科学的ではない。近代という特別な時期に、日本を抜きにしてモンゴル事情は論ずることができない上に、日本との関係が頻繁化された偽満洲国の政治舞台に活躍したモンゴル要人に「日本」という痕がよく焼き付けられていた。彼らが利用すべき諸勢力を利用し、自分を強固にさせてから民族を救おうという信念を強く堅持し、前向きな意義を持っている。日本に偏ったものだから「蒙奸」、国民党に頼ったものだから「反共産党」になる、と一概に言えない。

三、近代蒙日関係の中、官的より民間のほうがはるかに積極的な役割を果たしてきた。徳王がその政権を代表し政治目的で日本帝国主義者と接触し、「蒙日交流」を頻繁に行っていた。しかしこれが本当の意味での、人類が求めるべき交流ではない。徳王と違って、ロブサンチョイダン、テメートらが功利的でもなく政治的でもなく、日本の進んだ技術や知識を身につけ、自分の民族に力を尽くすといった目的で留学し、民間的な行動によって蒙日文化交流を大きく進めたのである。だから、「人間は平和とともに共存する」という精神に従い、歴史を鑑として未来に向かい、これからの蒙日関係を考える際、民間的なものをもっとも重要な位置につけ、地味に交流を行うことを求めるべきである。

文献・注

- 1) ジャライド旗は漢人が集中した内地と違い、人と土地関係も異なっていた。地元のモンゴル人をノトック人というが、彼らは放牧を主とし農耕にまだ慣れていなかった。糧食による利益にひかれ、外から移入してきた人を雇って小作人にした。同時に自分も放牧し体力労働を離脱したことがなかった。1948年ジャライド旗で土地改革運動を行い、内地のやり方に従って耕地で人を雇っているかどうか、雇った人数が多いかどうかによって地主判定をしたのである。それ故ほとんどのノトック人が地主にされ、批判された対象の比率が多くなり、モンゴル事情に相応しくないことが引き起こされた。
- 2) 佐々木健悦 (2013) : 徳王の見果てぬ夢 南北モンゴル統一独立運動. 社会評論社, p. 13.
- 3) 江上波夫 (1967) : 騎馬民族国家 日本古代史へのアプローチ. 中央公論社.
- 4) 矢野仁一 (1939) : 蒙古の過去と将来. 東洋史研究, 蒙疆専号.
- 5) 尹湛纳希著 (曹都, 陈定宇訳, 1981) : 泣紅亭. 内蒙古人民出版社, p. 28.
- 6) 王晓秋 (2006) : 中国人留学日本110年历史的回顾与启示. 徐州师范大学学报, 2006 (4), 1-3.
- 7) 杨早 (2016) : 寻史 清末民初为何扎堆留学日本. 北晚新视觉, 2016年07月04日.
- 8) 河原操子 (1909) : カラチン王妃と私. 芙蓉書房, 1969, p. 189.
- 9) 白荫泰, 邢莉 (2011) : 崇正学堂与贡桑诺日布的教育观. 民族教育研究, 2011 (3), 59-63.
- 10) 徐志民 (2009) : 抗战时期日本对蒙疆地区留日学生政策述论. 内蒙古师范大学学报, 2009 (5), 49-55.
- 11) 刘映元 (1985) : 内蒙古文史资料第二十辑 李守信自述. 内蒙古自治区文史资料研究委员会, p. 226.
- 12) 罗布桑措丹 (1981) : 蒙古风俗鉴. 内蒙古人民出版社, p. 367.
- 13) 罗布桑措丹 (1981) : 蒙古风俗鉴. 内蒙古人民出版社, p. 120.
- 14) 罗布桑措丹 (1981) : 蒙古风俗鉴. 内蒙古人民出版社, p. 368.
- 15) 纳古单夫 (1981) : 特睦格图略传. 内蒙古社会科学, 1981 (04), 128-132.
- 16) 札奇斯钦 (1937) : 蒙古の政治的地位居の変遷. 善隣協会調査月報, 1937 (06), 90-97.
- 17) 札奇斯钦 (1939) : 清代蒙古の地方政治制度. 蒙古, 1939 (04), 52-76.
- 18) 纳古单夫 (1995) : 札奇斯钦先生の简历与著作. 蒙古学信息, 1995 (01) 48-52.
- 19) 札奇斯钦 (2005) : 我所知道的徳王和当时的内蒙古. 中国文史出版社, p. 470.
- 20) 任翔 (2008) : 历史见证博彦满都. 名人出版社, p. 51.
- 21) 札奇斯钦 (2005) : 我所知道的徳王和当时的内蒙古. 中国文史出版社, p. 470.
- 22) 札奇斯钦 (2005) : 我所知道的徳王和当时的内蒙古. 中国文史出版社, p. 481.
- 23) 佐々木健悦 (2013) : 徳王の見果てぬ夢 南北モンゴル統一独立運動. 社会評論社, p. 72.
- 24) 刘映元 (1985) : 内蒙古文史资料第二十辑 李守信自述. 内蒙古自治区文史资料研究委员会, p. 305.
- 25) 刘映元 (1985) : 内蒙古文史资料第二十辑 李守信自述. 内蒙古自治区文史资料研究委员会, p. 304.
- 26) 刘映元 (1985) : 内蒙古文史资料第二十辑 李守信自述. 内蒙古自治区文史资料研究委员会, p. 309.
- 27) 長山義男 (1987) : 徳王の悲劇一戦中秘史. 自由, 29, p. 106-113.
- 28) 卢明辉 (2000) : 投靠日本分裂祖国的内蒙古徳王. 百年潮, 2000 (05) p. 27-31.
- 29) 卢明辉 (1980) : 内蒙古人的巨奸—徳穆楚克栋鲁普. 中国社会科学院近代史研究所, 民国人物传 (第2卷), 中华书局, p. 222-234.
- 30) 红敏 (2011) : 徳王出逃蒙古前后. 纵横, 2011 (03), p. 59-64.
- 31) 中見立夫 (2013) : 「満蒙問題」の歴史的構図. 東京大学出版会, p. 140.
- 32) イリナ (2004) : 徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について. 桃山学院大学国際文化学会, 国際文化論集, 桃山学院大学総合研究所, p. 67-104.
- 33) 佐々木健悦 (2013) : 徳王の見果てぬ夢 南北モンゴル統一独立運動. 社会評論社, p. 129.
- 34) 任翔 (2008) : 历史见证博彦满都. 名人出版社, p. 163.
- 35) 娜仁格日勒 (2016) : 日本敗戦後の李守信 反共・入獄・特赦・その後. 日本とモンゴル, 51 (133号), p. 54-80.

36) なぜかというならば、これはただ徳王ではなく、多くの人にも関わっていた問題であるからである。ここでポインマンドを例にしてみる。ポインマンド(博彦満都, 1894-1980年), 1925年内蒙古人民革命党が成立する際に主役を務めた。本党規約には、モンゴル民族には自主決定権力と自主管理権力がある、また男女を問わず参加できる民主政権を作ることを目指すと書かれている。1930年解散。偽満洲国時期ポインマンドが前後興安省代理省長、蒙政部民政司司長、興安局参事官、興安総省長などの要職に就き活躍した。日本敗戦後もとの内蒙古人民革命党を復活させ党員を集め、これからの道を討論した。1946年1月16日東蒙自治政府を成立し、自ら主席の位について部下を導いた。

彼と同じ歴史の節目にいた要人の中には、社会動態や情勢変化を迅速に把握し、蜂起したり革命者へ変身したりしたことで以後の政治運動に問題視されなかった人が少なかった。しかし、ポインマンドの変わりが遅れ、複雑な人物として置き去りにされ、政治運動時期にずっと批判される対象となっていた。彼が逝去する1980年の直前「民主人士」として中国政治協商委員会常務委員に認められた。

偽満洲国時期要職に就いた人を位置付けることは同じく繊細な問題であり、人々が敬遠している。任翔は『史见证博彦満都』を著作し香港で出版した。本書では漢民族出身研究者の角度からポインマンドの実像を描き、彼を「民族のため心身を尽くした革命者」と客観的に評価した。さらにポインマンドによる東蒙自治政府について、本書の中では「これは中国少数民族地域中ではじめての政府の形で現れたものであり、はじめての試しとして少数民族が多い中国ではいかに区域自治制度を施行するかについて積極的に働きかけた」と認めている。次に偽満洲国時期に活躍していたモンゴル要人について「潜伏」という言葉を使って、彼らの行動を見直すべきであると強調している。作者は、彼らは表には日本帝国主義者に奉仕しているが、裏には民族のため心身を尽くしていたという新しい観点を示した。

37) 危機意識はチンギス・ハーンの時代に主に封建帝国をいかに強固するのかに集中していた。その後の19世紀半ば頃インジャンナシなど文人たちが社会の暗黒と腐朽を激しく批判し、作品のフィクションから理想的な世界を求めようとしていた。

ところが、近代における危機意識はこれまでと違って、極めて理性的であり、民主主義のもと民族問

題、教育改革、土地保障、遊牧経済に目を向け、多角的な実践を積み重ねた。特に土地闘争が勃発したことは近代の危機意識の範囲がより広げられ、一般庶民のところまで浸透したということ物語っている。土地闘争とは、漢農民の入植や耕地の拡大などにより遊牧地が縮小し、生計が難しくなった環境のなか土地を守り土地商人や漢人を駆除しようという目的で蜂起したことを指している。東部モンゴルではガダメーリン、トゥクトフら、西部モンゴルではシネラマらによる闘争が相次いで現れた。彼らが「英雄」と呼ばれ、物語が歌のかたちで村から村へと伝えられていった。近代の危機意識はまるで幅広い河のようにモンゴル地域を勢いよく流れていたのである。

Received date 2018年5月29日

Accepted date 2018年8月3日